

のプランゲ文庫のデータベース，および山本武利ら作成の『占領期新聞・雑誌データベース』を用いて，調査する内容を精選している．また，調査対象の出版物が日本国内に所蔵されているか否かも調べている．

現地では，看護に関する雑誌，ポスター，ビラ，パンフレットリスト，および検閲文書を対象に調査を進めている．上述したように史料が膨大であり，かつ紙の劣化も進み，調査は時間との戦いと言っても過言ではない．

プランゲ文庫の史料を用いた研究は，思想，教育，童話分野では行われているが，医療および看護分野を対象とする研究者は著者しかいない．

### 3. 地方の組織が発刊した看護の機関誌

プランゲ文庫において，地方の組織が発刊した看護の機関誌5誌を発見した．第二次世界大戦後はじめて発刊された看護の雑誌（大阪府）は1946年7月の「保健婦事業」，保健婦協会北九州支部で1946年8月の「まごころ」，熊本縣保健婦協会文化部代表者福井京子で1947年6月の「保健婦」，埼玉県で1947年9月の「愛のひかり」，長野県保

健婦協会の1947年11月の「すこやか」であった．

その内容を分析した結果，以下のような事実を明らかにすることができた．

- 1) 地方における看護の機関誌は，5誌中4誌が保健婦により発刊されており，5誌ともGHQ看護課の影響を受けていた．
- 2) プランゲ文庫所蔵の機関誌5誌のうち「保健婦事業」は「看護」（日本看護協会；1949）の発刊とともに廃刊となり，「愛のひかり」は「看護」発刊後も1954年12月まで出版されていた．しかし，他の3誌は廃刊の時期が不明である．
- 3) プランゲ文庫に所蔵されている5誌のうち，『日本看護協会史1』（日本看護協会出版会；1967）に記録されていたのは「愛のひかり」のみであった．プランゲ文庫収集対象期間に発刊され，『日本看護協会史1』に記録されていたのは「愛のひかり」と「ともしび」（青森；出版年不明）であったが，「ともしび」はプランゲ文庫には所蔵されていなかった．

（平成22年12月例会）

## 書籍紹介

### 小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会 編 『小野蘭山』

明治42年小石川植物園で蘭山没後百年の記念行事が開催され，『植物学雑誌』は第269号を蘭山記念号とした．蘭山没後二百年に当たる今年，記念式典やシンポジウムが行われ，京都府立植物園に「小野蘭山顕頌碑」が建てられ，記念誌として本書が刊行された．幅広い年代の著者26名が，多方面から蘭山にアプローチした論文25編，資料8編を収める約650頁の大著である．

巻頭は，門人・谷文晁が敬写した迫真の「小野蘭山肖像」，次いで植物画にも才能を発揮した蘭

山による『花彙』の挿図，肉筆の百合図，書が続く．口絵14の自筆『本草綱目草稿』は，蘭山が『本草綱目』の講義に用いたもの．袋綴じの折り目を切って裏面まで細かな文字でびっしり，朱墨で書き込み尽くす．ラテン語・ポルトガル語・オランダ語の植物用語や図も書き入れ，さらに補充・訂正を重ね，亡くなる直前まで使用したという．その遺稿から溢れる研究者としての情熱・気迫には圧倒される．

記念事業会会長の邑田仁氏は「序にかえて」で，

本事業と記念誌刊行の経緯を語り、蘭山の魅力を牧野富太郎と比較しながら、愚直とも言うべき変人ぶり、深い観察による同定、じっくり時間をかけ熟成した学問にありとする。

論文は3部に大別される。【蘭山と学問】で大場秀章氏は、実物の検討なしに考究する「名物考」に始まった日本の本草学が、『本草綱目』の輸入から博物学となり、貝原益軒は実地の観察で中国書にない植物も『大和本草』に記録したものの記述は簡単雑駁であった。蘭山は『本草綱目啓蒙』に植物等の方言名も列挙検討し、より緻密で科学性の高いものとしたが、なお統一的な命名法や学名、分類体系への考察はなかったとする。

磯野直秀氏は日本の博物誌はいつも「人」と密着しながら動植物を見、雑然としているが「広く、浅く、誰でも近づきやすい」という点が優れる。『啓蒙』は多くの知識と方言も収録したため各地の門下生が正しく薬を餞別できるようになり弟子も多く育ち、現在まで小学館『日本国語大辞典』の動植物名の引用に、蘭山の業績を見ることができるとする。

杉本つとむ氏は、「採薬」というフィールドワークとそれによって記録した「民俗」の世界を現地調査の功績と称え、方言の収録には文化人類学の萌芽をみることができるとし、平野満氏も採薬を評価、太田由佳氏は蘭山の師・松岡如庵には儒者・神道家としての継承者が多く、本草を継ぐ人の稀であったことを指摘する。町泉寿郎氏は、蘭山門人・木内政章の事跡と業績をカルフォルニア大学所蔵資料から整理し、政章学問を考証医学への展開を示す事例と位置付ける。長田敏行氏は、古義学と見られる益軒と蘭山が本草に大きな貢献をし、儒学が日本人を洋学へ導く上で寄与した功績は大きいと説く。幸田正孝氏は、松平定信の命により翻訳されたドドネウスの『草木誌』の植物が何であるかを、江戸の蘭山が鑑定したことを述べ、小野強氏は、蘭山関係資料を国会図書館に寄贈するまでのご苦労を語る。

次の【蘭山と自然】で、高橋達明氏は蘭山の『本草綱目』講義本83部の系統立てと編年を検討する。その写本一覧は蘭山の研究が『啓蒙』に昇華

する経緯と資料の所在を知る上で貴重なデータとなっている。

坂崎信之氏は、蘭山が愛読した陳扶揺『花鏡』の影響は、30代で刊行した『花彙』にも見られるが、若さの勇み足で『花彙』には実在しない合成図も描いた。しかし後年、蘭山は『花鏡』の内容を検討し続け、知らないことは「未詳・不詳」、伝聞は「ト云ウ」とし、情報はその出処を示し、日々学んでいく姿勢を弟子たちに示したという。

邑田仁・裕子氏は、『啓蒙』が薬物書『本草綱目』の講義録であるので、項目名が薬名のため一項目に複数の基原植物があり、その項目が『本草綱目』の配列順に並んでいることも講義録として当然で、また薬物書として当時スタンダードであった『本草綱目』の配列を採用することは項目名の検索や他の書物との比較上でも重要、とされた。

加藤僊重氏は、シーボルトコレクションに蘭山の植物標本を発見し、植物標本を作る習慣がすでに日本にあったことを示す貴重な資料とした。平野恵氏は、蘭山が植物図譜を美術として評価できるものに高め、門人・谷文晁と弟子にも蘭山の学統を見いだせるし、そうした植物の描写、図譜の版行、江戸文人との交流などが19世紀本草学史の特徴とした。米田該典氏は『啓蒙』に蘭方医の用いた蘭薬の代用薬の記載があると述べる。また各分野の研究者が蘭山と花・きのこ・スミレ・アシタバ・鉱物について、興味深い研究を寄せる。

そして【蘭山と東西文化交流】で、メテリエ氏は蘭山の植物用語は本草の範囲を出なかったが、後継者たちが新しい用語を創出し、1874年文部省の出版した小野職愨『植学訳筌』で近代植物用語が定着したとする。松田清氏は、蘭山がワインマン『花譜』模写図(83葉)を、ドドネウス『草木誌』に和漢名を与える仕事の際に、ミュンテングヤキニホフなどの書物と共に参照・模写したものとした。山口隆男氏は、大河内存真がシーボルトに贈った蘭山の『花彙』を、後年シーボルトは『Flora Japonica (日本植物誌)』に活用したという。遠藤正治氏は、蘭山が植物の部位や成長による形態の変化にも注目し、ラテン語・ポルトガ

ル語・オランダ語の植物用語も学び取り、その蘭山の用語を宇田川榕菴は『植物啓原』に用い、飯沼慾齋は『草木図説』で図は『花彙』を、解説は『啓蒙』を学んだとした。竹中梨紗氏は、ロシアのマクシモーヴィッチに蘭山の著書が贈られたことを述べる。

巻末の資料編は、磯野直秀氏の「蘭山の足跡」はじめ書簡集、門人録、著作一覧、年譜、系図など充実した労作が揃う。いずれもこれからの蘭山・本草・博物誌・科学史研究に欠かせないものとなる。

「日に新たに」実物から、東西の書物から最晩

年まで学び続け、いつ入浴し、寝るのかも分からなかったというほど研究に没頭し、真実の姿を求めていった研究学徒・蘭山の姿が、この書から浮かび上がる。もとより人間は時代や地域の限界の中でしか生きられない。しかしその姿勢は時代を超えて生き、後継者たちに受け継がれ、業績は海外にまで影響を及ぼしていた。そのことにしづかに大きな感動を覚える。

(岩間眞知子)

[八坂書房, 〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-4-11, TEL. 03 (3293) 7975, 2010年7月, A5判, 648頁, 12,000円+税]

## 家本誠一 著

### 『黄帝内経素問訳注』・『黄帝内経霊枢訳注』

『黄帝内経素問』(略して『素問』)と『黄帝内経霊枢』(略して『霊枢』)は、①古代漢語で書かれている、②古代の医学書である、③鍼灸医学が中心である、④古代の中国思想の影響をうけている、などの特徴を挙げることができる。つまり、『素問』・『霊枢』を注釈するには、①～④の教養が欠かせないのである。畢竟は、中国文学と東洋思想を専攻し、近代医学および漢方・鍼灸を学んだ者でなければ、『素問』・『霊枢』の注釈という大業はなし得ないといえる。望むらくは、より高い知識とより深い臨床経験があるならば、さらに真に迫ることができるだろう。

小川環樹らは、『史記列伝』の「はじめに」(第1冊, 岩波文庫)で、「ただ七十巻のうち第四十五の扁鵲倉公列伝と第六十八の亀策列伝のみを省略した。前者は医学の記述、後者は亀卜の方法について、私どもの訳者の学力甚だ浅く、正確に訳しうる自信がないからである」と述べているのが、何よりの証拠である。

著者は、まさに適任者である。医師であり、その上に漢方や鍼灸も研鑽されているし、古代漢語の勉強は、48歳(昭和46年)から始め、40年近くのキャリアをお持ちである。

近50年の『素問』と『霊枢』の注釈作業には次のものがある。

- ① 丸山昌朗著『校勘和訓黄帝素問』『校勘和訓黄帝鍼経』
- ② 柴崎保三著『黄帝内経素問新義解』
- ③ 宮沢正順著『素問・霊枢』
- ④ 小曾戸丈夫・浜田善利著『意积黄帝内経素問』『意积黄帝内経霊枢』
- ⑤ 南京中医学院編・石田秀実監訳『現代語訳黄帝内経素問』『現代語訳黄帝内経霊枢』

この度の『黄帝内経素問訳注』・『黄帝内経霊枢訳注』はこれらに続くものであるが、近代医学の視点と、長年の臨床経験を踏まえて読み解いたことに注目すべきである。今までの注釈で最も足りなかったところである。

その成果は、本書の「素問概説」・「霊枢概説」(共に第1巻にあり)に要約されている。古代医書としての全体像から、医学概論、各論、専門用語までをいねいに解説している。これはすみずみまで読み切った人しか書けない貴重な部分である。たとえば、「経脈は血管神経複合体である」